

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 94

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 1861. 山間の景色に広がる仮想通貨の値動き
- 1862. 仮想通貨とつながる無意識
- 1863. MOOCの研究へのテキストマイニングの活用
- 1864. デューイの全集・ベートーヴェンの手紙
- 1865. 二夜連続の仮想通貨に関する夢
- 1866. 非日常的日常と日常的非日常
- 1867. 日々を生きるために
- 1868. 暗闇の早朝に思う来年の春
- 1869. 創造的中毒症状と美的感覚
- 1870. 時空間を超えるゴッホの手紙とハーモニー
- 1871. 一年の重み
- 1872. 自己超出と時間超出
- 1873. 豪華客船の旅
- 1874. 言葉と音の光に包まれて
- 1875. やってくる冬への高揚感
- 1876. トマトとブルーベリーから
- 1877. 対岸に向かう夢
- 1878. 此岸から彼岸へ
- 1879. 誤りなき人生
- 1880. 美と内面的成熟

---

## 1861. 山間の景色に広がる仮想通貨の値動き

一つ日記を書き留めておいたところで顔を上げて窓の外を眺めると、外はいつこうにして闇に包まれている姿が目にはいった。遠くの闇をぼんやりと眺めながら、昨夜の夢について振り返っている自分がそこにいた。

夢の中で私は、一台のタクシーに乗ってどこかに向かっていた。時刻は昼の時間帯。

そのタクシーは山間の道を走っており、あたりの景色は自然に包まれていた。タクシーの運転手は、小中学校時代に最も仲の良かった友人の一人だった。私は後部座席に座り、運転手である友人と話すこともなく、しばらく窓の外を眺めていた。

すると窓の外には、その辺りの地図が大きく広がっていた。つまり、窓の外空間に、大きな地図が空中に浮かんだ形で広げられていたのである。カーナビの表示が外の空間に投影されていたと述べればイメージがつきやすいかもしれない。

外の空間に投影された地図を何気なく眺めていると、私が乗っているタクシーの進行が波を打って地図上に表示されているように見えてきた。つぶさにその様子を観察していると、波打つパターンが、どうやらある仮想通貨の値動きと連動していることがわかった。それに気づいて以降、私の関心はさらに高まり、より一層注意深く地図上のタクシーの動き、つまり仮想通貨の値動きの様子を観察することにした。

この日の前日、私は山間にある一つの小学校を訪れ、その学校の教員室の前の廊下で別の友人と偶然に出会った。挨拶もそこそこに、その友人は私に対して、仮想通貨の話を持ちかけていたため、今この瞬間に、タクシーの窓の外に仮想通貨の値動きが見える光景の偶然について考えていた。

仮想通貨の値動きのパターンを考えたり、前日の友人との会話を思い出したりと、自分の頭も複数の事柄で波打っているかのようなようだった。前日に友人から話があったのは、仮想通貨の取引方法と投資戦略に関するものだった。端的には、それら二つについて友人は私の意見を求めていたのである。私はそれら二つについて自分なりの意見を提示したが、結局仮想通貨というものをいかに捉え

---

ているかが最も重要である旨を伝えた。すなわち、取引方法や投資戦略云々ではなく、仮想通貨が持つ本質的な意味は何であり、究極的には、仮想通貨に付されている数字の虚構性に気づけるかどうか最も重要である旨を伝えた。

おそらく、そうした重要な事柄はあまりうまくその友人に伝わっていないようであり、補足的に私が紹介した具体的な取引方法や投資戦略のみが友人に伝わっていたように思う。結局、そのような状態であっては、いつまで経っても仮想通貨に飲まれたままであり、金融の世界の外側に広がる世界にアクセスすることは不可能だと思う。

この世界のほぼ全ての人と同じように、その友人はまだ金融の世界の物語を純朴に信奉しており、その世界の物語の虚構性に気づき、その世界の外側の世界を一切認識してないようだった。そのようなことを思い出しながら、私は再びタクシーの後部座席から窓の外を眺めていた。

窓の外に広がる空間に映し出された地図上に、タクシーの動きが緑色の光の筋となって表示され、その筋は引き続き、ある仮想通貨の値動きを示していた。窓の外側の景色と仮想通貨の値動きに対する関心が弱まったところで、私は運転手である友人と会話を始めた。

しばらく会話を続けた頃だろうか、友人がふと話題を変えた。

**運転手の友人:**「そろそろタクシーのメーターが10万円に行きそうだけど大丈夫？」

**私:**「そうか、じゃあそろそろ下ろしてもらえる？」

**運転手の友人:**「どの辺りで下ろそうか？」

**私:**「あのコンビニの前でお願い。そうだ、休憩がてらに何か飲み物を買ってくるから、コンビニの前でもう少し話そう」

**運転手の友人:**「ありがとう。あっ、そういえば、運賃が5万円を超えたら6割引になる決まりをすっかり忘れてた」

**私:**「そんなルールがあるの？」

---

---

運転手の友人:「うん、ちょっと待ってね。6割引をすると今の金額は・・・まだ5万円弱だね」

私:「それは良かった。じゃあもう少し乗せてもらえる？」

友人が運転するタクシーにそこからさらに乗せてもらえることがわかり、友人とゆっくりと会話を行える喜びの感情が芽生えたところで夢から覚めた。

時刻は早朝の七時半を迎え、今この瞬間、目の前の通りを走る一台のバスの音が聞こえた。それは水しぶきを上げながらどこかに向かって去っていった。また新たな一日がゆっくりと始まるようだ。

2017/12/4(月)07:33

### No.506: Art

Art, that is my life-long passion. Art in education is my academic zest.

Can we restore humanity through art? I believe we can. I determined to steer the direction of my life for the exploration of art in education. 08:16, Saturday, 12/9/2017

## 1862. 仮想通貨とつながる無意識

昨夜の夢にはいくつか気になることがあるのだが、その中でもとりわけ、ある仮想通貨が夢の中で現れたことについて、起床から四時間が経った今、再び考えを巡らせている。

ここ数ヶ月間、仮想通貨に関する夢を何度か見た。夢の中で現れる仮想通貨は常に、実際に私が数年前から保有をしている仮想通貨である。ちょうど今から二年前、私が日本に一時帰国していた際に、大変興味深く、愛着の湧く仮想通貨と出会うことができたため、その通貨を保有することになった。

その通貨の価格についてはほとんど関心を払っておらず、その通貨を保有していることすら忘れて長らく生活をしてきたが、ここ数ヶ月の間において、何度かその通貨が夢の中に現れてくることを不思議に思っていた。その仮想通貨と私の無意識はどこか連動しているかのようにすら思える。その

---

通貨は日本発のものであり、とても特色のある通貨であるから、それを応援している日本人の数も最近は増えているのかもしれない。

奇妙なことのように聞こえるかもしれないが、この仮想通貨を取り巻く集合意識と私の無意識が連動し始めているかのように思えて仕方ない。昨夜にもその通貨が夢に現れたため、起床後にその通貨の価格を確認してみた。すると、以前夢に出てきたときよりもさらに価格が上がっていた。

夢を通じてその通貨について思い出し、その価格が上がっていることを知るたびに、インターネット上にある日本語のニュースや記事を調べるようにしている。あれこれと調べていると、その通貨を取り巻く状況が徐々に変化しているようだった。この通貨についてはどこかでまた詳しく紹介したいと思うが、他のどの仮想通貨よりも愛着が湧くから不思議である。

昨今、数多くの仮想通貨が発行され、仮想通貨に対する注目は高まる一方である。しかし、それらの多くの仮想通貨はどれも大抵、投機目的で扱われており、全く関心を持つことができなかった。そうした中、私が応援している仮想通貨は独自な特徴をいくつも持っており、他の仮想通貨にはない立ち位置を持っている。その通貨の動向については今後も着目をしていきたいと思う。

その仮想通貨に関する夢を見るたびに、その価格が上がっているというのは本当に不思議なことである。それはおそらく、その仮想通貨を取り巻く集合意識と自分の無意識が繋がっており、共鳴しているからなのかもしれない。2017/12/4(月)10:35

#### No.507: “The Study of Counterpoint (1965)”

Happily, I received “The study of counterpoint (1965)” from Amazon today. This book was originally written in Latin by Johann Joseph Fux (1660–1741). I knew that a number of great composers such as J. S. Bach, Haydon, Mozart, and Beethoven studies with this book.

I have to appreciate Alfred Mann’s translation. This book will definitely be one of my bibles for music composition. 20:20, Saturday, 12/9/2017

---

### 1863. MOOCの研究へのテキストマイニングの活用

今日は不思議と、昼食後と夕食後に頭があまり冴えないような感覚があった。何か見えない疲労のようなものがあったのだろうか。

いつも通り、昼食後しばらくしてから昼寝をすると、いつもは20分したら目を覚ますのだが、今日は倍近くベッドの上で仰向けになっていた。滅多にこのようなことはないのだが、脳や身体がいつもより長めの休息を欲している時はごくたまにあり、今日はそうした日だったのかもしれない。

夕食後にも同様の疲労感のようなものを感じたため、数分間ほど椅子に座って静かに目を閉じていた。

今日は夕方から研究グループのミーティングがあった。いつもと同じように、大学のカフェテリアに行き、そこでアドバイザーのミヒャエル・ツショル教授と研究グループのメンバーであるハーメンと共にミーティングを行った。今日のミーティングもいつもと同じように、非常に有益なフィードバックをいくつも得ることができ、今後の研究に弾みがついたように思う。とりわけ、今回の研究に関する定量化の方向性が明確になり、今日得られた考え方を採用すれば、研究は一気に進んで行くだらう。

ツショル教授からの提案の中で、私が採用しようとする定量化方法であれば、プログラミング言語のRを用いると非常に効率的に分析が進むという意見があった。これは特に私にとって有益な助言であった。というのも、定量化に関しては、およそ3000ほどのテキストを一つ一つ手作業で分析を進めていこうと思っていたからである。

Rを用いてテキストマイニングを行えば、より効率的かつ客観的に分析を進めることができる。もちろん、Rを用いて自動的に分析をしたとしても、今回取り上げるMOOCの内容は私の関心に合致したものであるため、3000のテキストデータには全て目を通すつもりである。

ここ最近、AIやテキストマイニングを活用した発達測定について考えを巡らせていたところであったため、実際にテキストマイニングを活用することになった偶然には驚かされる。ただし、Rを用いてテキストマイニングを行ったことがないため、それ専用のプログラミングコードには慣れる必要があるだろう。

---

昨年から今年にかけての研究や授業の中で、Rを活用する機会が随分とあったため、Rに対する抵抗感はない。むしろ、作曲実践と同じぐらいに、プログラミングコードを書くことには独特の喜びと充実感が伴う。今回の研究を通じて、Rを用いてテキストマイニングをどのように行うのかについて、また一から学びを深めていくことができるという幸運を得た。

自分の関心に沿った研究を行うことを通じて、知らず知らず自分の専門知識や専門技術が拡張しているのを日々実感する。今回の研究では新たなにテキストマイニングを行うことになるが、本当に近い将来に、AIを用いた研究、あるいはAIに関する研究に従事するようになるかもしれない。

今日はこれから少しばかり作曲を行ってリフレッシュし、少しばかり早く就寝しようと思う。2017/12/4 (月)21:12

#### No.508: Ceaseless Encouragement from Alexander Borodin and Vincent van Gogh

Alexander Borodin and Vincent van Gogh are always beside me. That is why I was able to begin music composition after I was 30 years old. Because the masters always reside in my spirit, I can devote myself to music composition without a shadow of doubt. Only creative lights dwell in my soul. 20:36, Saturday, 12/9/2017

#### 1864. デューイの全集・ベートーヴェンの手紙

昨夜は少し早く就寝しようと思っていたが、ひとたび作曲実践を行い始めると、創作行為との没入感が生まれ、いつもと同じように10時に就寝した。

今朝、六時に起床した時に、再び自分の身体と精神に活力が戻っている感覚があった。昨日は季節の変動のせいもあってか、昼食後と夕食後に少しばかり疲労感があった。食事というのはエネルギーを補給しているようでいて、実際には消化にエネルギーを活用するため、食事というのは時に疲労感をもたらす得るということがわかる。

昨日から一転して、今日はとても調子が良く、仕事が多いにはかどるであろうという期待感がある。昨日の夕方に行われた、研究アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授とのミーティング後、自宅に戻ってからは随分と研究に関する事柄をメモとして英文日記に書き留めていた。おそらく今日もいく



---

つかアイデアが生まれるであろうから、それらを忘れずに書き留めておきたいと思う。だが、今日は基本的に研究から意識的に離れ、昨日から読み始めたジョン・デューイの全集を読み進めていきたい。この全集は全二巻の構成となっており、最初の巻は400ページほどの文章である。毎日100ページずつ読み進めていく計画を立てているため、来週を迎える頃には第一巻を読み終え、第二巻を読み始めることができているならば理想的である。

デューイの全集を読み進める合間合間に作曲実践を行っていききたい。現在読み進めている“Melody writing and analysis (1960)”との相性が良いのか、毎日本書を開くのを楽しみにしながら作曲実践に従事することができている。本書の出版年は随分と古いが、とにかく具体的な事例が豊富であり、楽譜の断片が数多く掲載されているため、それを作曲ソフト上に再現しているだけでも随分と学びになる。また、具体的な事例の後にはエクササイズが必ず設けられており、そのエクササイズに取り組みながら本書を進めていると、メロディー創出方法の理論と技術が自然と高まっているのを実感する。

エクササイズの難易度も最適であり、前掲の具体例を参考にすればエクササイズの問いに回答できるような作りになっている。もちろん、全てのエクササイズは知識を試すような問いではなく、実際に曲を作ることを要求する問いになっている。数多くのエクササイズに取り組むことによって、知らず知らずのうちに自分で生み出したメロディーの断片が蓄積されて行っている。今はとにかくメロディーの創出に注力している段階であり、ハーモニーの創出についてはこれからである。

とりあえず曲と呼べるようなものを作るためには、まずはメロディーを創出する技術を高め、同様にハーモニーの創出に関する技術を高めていく必要があるだろう。後者に関する理論と技術の習得についてはこれからの課題とする。

昨日は一つ嬉しいことがあった。配達のプロセスの中で紛失してしまったと思っていた、ベートーヴェンの手紙が収録された書籍が自宅に届いたのである。注文したイギリスの書店に、もうすでに返金処理までしてもらっていたのだが、配達予定時期よりも三週間近く遅れての到着となった。

現在、ゴッホの手紙を毎日少しずつ読み進めながら、手紙の持つ力について日々考えを巡らせている。ゴッホの手紙は私に大きな影響を与えており、ベートーヴェンの手紙も私に大きな影響を与

---

えるだろう。いつか過去の偉大な芸術家や作曲家の手紙や日記を調査する研究を行ってみたいと密かに思っている。2017/12/5(火)07:11

#### No.509: Dialoge Format

I was quite surprised by the fact that the book “The study of counterpoint (1965)” was written in the form of dialogue. The original Latin version was written in 1725. I was astonished by the fact that this kind of book already existed at that time.

This dialogue-based book reminded me of Socrate’s dialogue written by Plato. I will closely read this book from tomorrow. 20:55, Saturday, 12/9/2017

#### 1865. 二夜連続の仮想通貨に関する夢

昨日、現在応援かつ保有している仮想通貨に関する夢を見るたびに、その価格が上昇していることについて言及していたように思う。仮想通貨に関する夢を連続して見たことはこれまで一度もなかったのだが、一昨日に引き続き、昨夜もその仮想通貨に関する夢を見た。

その仮想通貨が現れるこれまでの夢と同じように、夢の中で私はその仮想通貨について説明をしていた。一昨日は友人に対する説明であったが、昨夜の夢の中ではそれについて家族に対して説明を行っていた。

夢から覚めた瞬間に、昨日立てていた奇妙な仮説を検証することにした。その仮想通貨を取り巻く集合意識と自分の意識とのつながりに関する仮説であり、より具体的には、その仮想通貨の夢を見るたびにその価格が上昇しているかどうかというものだ。起床後、いつものように心身を整える実践を行ってから、その仮想通貨の価格を調べてみた。すると案の定、その価格が上昇していた。

夢とその仮想通貨との関係をもう少し詳細に捉えてみると、その仮想通貨に関する夢を見る時にその価格が単に上昇しているわけではない。夢を見る時は、その価格が大幅に上昇しているか、その仮想通貨に何か重要な出来事が起こった時である。今朝の場合で言えば、その仮想通貨がこれまでにない価格帯に乗った出来事があった。

---

自分が見る夢と応援している仮想通貨がこれほどまでにシンクロナイゼーションしている様子を見ながら、つくづく人間の意識というのは不思議だと思った。この現象についてはもう少し経験データを集めながら、その他に興味深い発見事項はないかを探求したい。

自分が見る夢とその仮想通貨の価格の妙な関係性に気づいてから、その通貨に関する夢を見るごとに、その通貨のみならず、仮想通貨全般に関する学習をするようになった。時間としては、せいぜい一、二時間ほどだが、そのたびごとに毎回大きな学びを得ているような気がする。現在保有している通貨以外の他の仮想通貨には一切関心がないが、それらの仮想通貨が持つ一つ一つの固有の技術や特性を眺めていると、時代の大きな変化を予感する。

一昨日の夢の中で仮想通貨が現れたため、昨日も仮想通貨について少しばかり考えを深めるために調べ物をしていたこともあり、今日はもはや仮想通貨に関する学習を控えようと思った。単純に、応援中の仮想通貨の価格を調べ、関連する記事を二つ、三つ読んだだけである。おそらくその仮想通貨の価格は今後も上昇していくと思うが、何か大きなイベントが起こるのはまた少し先のことになるだろう。その時にまた何かしらの夢を見るかもしれない。夢を見た時に、その通貨の価格がどうなっているかをまた調べてみたいと思う。2017/12/5(火)07:31

#### No.510: Grieg's "Little Bird"

I listened to Grieg's "Little Bird." It made me imagine that an actual bird is twittering. Music really has such an evocative power to make one Idea embodied as a form of music. 07:39, Sunday, 12/10/2017

#### 1866. 非日常的日常と日常的非日常

気がつくと時刻は夜の八時を過ぎていた。結局今日は、予定よりも多くの時間をジョン・デューイの全集を読むことに充てていたように思う。400ページほどにわたる第一巻のうち、100ページほど本日に読もうと思っていたが、実際には200ページ以上も読み進めていた。デューイの英文は明晰であり、明瞭な言葉に引き込まれていくかのような感覚があった。当然ながら全ての箇所を理解できたわけではないが、読み進める中で数多くの気づきを得ることができ、それが触媒となって様々な思考が自分の中で育まれていった。

---

良い書物とはこのように、自らの思考の肥やしとなり、新たな思考を生み出す種となる。全集の一つ一つの章を読むたびごとに、あるいはいくつかの段落を読み終えるごとに、新たな考えが芽生え、それをもとに様々なメモを書き残していた。

明日を用いれば、残りの半分を読み終えることができそうだ。デューイの全集を読み終えた後は、再び自分の研究に立ち返り、先日に印刷をしておいた七本の論文に目を通しておきたい。それら七本は、どれもフラクタル分析に関するものであり、データベースを検索して得られた500本の論文から選んだものだ。自らの研究に最も有益であろう、それら七本の論文を読むことを明日の楽しみの一つとしたい。

今日は夕方に近所で一つ騒ぎがあった。救急車や消防車が、書斎の窓から見える赤レンガの家々の一つに駆けつけた。

近所を散歩中の人たちも道端で立ち止まってその家を眺めていたり、その家の付近には人が集まっていた。何か事件があったのかと思っていたが、どうやら小さな火事が発生したようだった。その家から白い煙が立ち込めており、外の寒さも影響してか、煙の様子がはっきりと肉眼で確認できた。幸いにもそれほど大きな火事ではなく、事態も深刻ではなかったようだ。

その騒ぎから数時間が経過した今となっては、辺りは嘘のように静まりかえっている。人間の日常とは一体何なんだろうかと考えざるをえない。

日常の中に潜む非日常。あるいは逆に、日常とは、非日常の中の小さな一部なのかもしれない。

何が日常で、何が非日常なのか。日常と非日常の境目は一体どこにあるのだろうか。

突発的にやってくる非日常の世界を目撃するとき、それに打ちのめされないだけの精神的な強靭さを持つことはそれほど容易ではない。それほどまでに私たちは、日常の世界を馴れ合いに生き過ぎている。

今日のその一件は、紛れもなく非日常的な出来事だったはずなのだが、それが日常の中に溶け込んでいく。あの出来事は一体何だったのだろうか。

---

夕食後、来年の夏にオランダでの生活を終えることになったら、渡欧直前から渡欧後に執筆した日記をまとめたいと思った。欧州での二年間の生活を振り返り、また新しい生活を始めるに際して、これまで書き留めておいた日記を一度全て編集したいと思うに至った。おそらく、その分量は膨大なものになる予感がしているが、オランダを離れる最後の月に、欧州に渡る直前の日記、そして欧州での生活を通じて書き留めた日記をまとめるという作業に取り掛かりたい。

非常に些細なことのように思えるかもしれないが、これは自分にとってとても大切なことのように思われた。果たして来年の夏にその日がやってくるのだろうか。2017/12/5(火) 20:39

No.511: “Postformal Cognitive Theory and Developmental Stages of Musical Composition(1989)”

I read the article “Postformal cognitive theory and developmental stages of musical composition(1989)” again. The article is utterly insightful to analyze the developmental stages of Beethoven based on adult development theory.

All of the explanations contain very rich information to expand my thoughts on developmental stages of musical composition. I realized that I wanted to conduct this type of qualitative research on musical composition in my future. I will examine as many references as possible as far as they are relevant to my research interest. 13:23, Sunday, 12/10/2017

#### 1867. 日々を生きるために

呼吸を止めては生きられないのと同じように、文章を書かなければ毎日が生きられなくなった。それがいかにとりとめもなく、些細なことのように思えても、内側で生じた思考や感覚を全て言葉として文章の形にしなれば日々を生きられなくなった。それに加えて、最近作曲を毎日行われなければ日々を生きられなくなっている。

日々が絶えまない創作活動から構成され、絶え間ない創作活動が日々となるような生活。この生活をもっと徹底させ、創作活動以外の塵がこの生活に入り込まないようにしていく。

絶えず文章を書き、絶えず曲を作る。自分にできるのはそれだけしかないだろうし、それ以外に望むことは何もない。

---

内側に浮かんだ内面現象の全てを言葉と音楽にしていく。それをもっと厳密に行い、自分が知覚した内面現象をそっくりそのまま映し出すような言葉と音楽を創出していきたい。それが実現されるのは、まだまだ随分と先のことだろう。そのため、言葉の創出方法と曲の創出方法の探究を日々着実に進めていく必要がある。どちらも共により意識的に進めていくことが求められる。

夕方、作曲に関して、詩人が言葉で詩的言語世界を表現するかのように、画家が絵筆で絵画的な世界を表現するかのように、曲でそれら双方の世界を表現したいと思うようになった。つまり、詩的な音楽かつ絵画的な音楽を作りたいという抑えがたい思いが湧き上がってきたのである。

詩の独特な世界が生み出す質感を曲として具現化し、絵画の独特な世界が生み出す質感を曲として表現していく。詩のような音楽かつ絵画のような音楽をどうしても作りたいという思いを抑えることができない。しかも、そうした詩的かつ絵画的な音楽を、その場で即興的に即座に創出できるところまで自らの作曲技術を高めたいと思う。

詩人がその瞬間の現実世界の本質的な現象を掴み、その場で詩を詠うように、その瞬間の詩的世界を音楽にしていく。同様に、画家がその瞬間の本質的な現象を絵画として表現するように、その瞬間の絵画世界を音楽にしていく。

こうした思いは熱情的であり、同時に切実なものだと言える。生きていることの克明な記録をしなければ、日々を生きていくことができない。克明に自らの内面世界を表現していくことの中で、初めて自分が生きているという強い実感を得ることができる。あの一瞬の中にあつたこと、この一瞬の中にあつたことを見逃したくないのである。

その一瞬に、生きることの奇跡が内包されている。とにかく文章を書き、とにかく音楽を作る。

今後もより一層の精進を重ねながら、日本語と英語という二つの自然言語の能力を涵養していく必要がある。私はまだ日本語と英語をうまく使えない。自分の内面世界の現象を厳密に表現していくための力が、今の私にはないのである。自然言語に関しては、とにかく日本語と英語に絞り、内側の現象がありのままに正確に表現できるところまで言語能力を涵養していく必要がある。その道のりは長く険しいものになるだろう。それと同様に、いやそれ以上に険しい道が広がっているのは、作曲技術に関してである。

---

---

私は日本語や英語以上に、音楽言語に大きな期待を寄せている。音楽言語が自分の内側で大きく育まれた時、自然言語では把捉できない内面現象の機微をつぶさに表現できるのではないかと思うのだ。その実現に向けて、これからまた少し作曲実践に取り掛かりたい。2017/12/5(火)20:58

#### No.512: Art and Human Development

My enthusiastic interest in art and human development squirts from my soul. I will step into the field of research. In particular, I will conduct research on developmental processes of aesthetic understanding of music and musical composition skills. Both developmental processes are my passionate research domains. 15:08, Sunday, 12/10/2017

#### 1868. 暗闇の早朝に思う来年の春

今朝は五時に起床し、五時半から仕事を開始した。今日も昨日に引き続き、ジョン・デューイの全集を読み、今日中に第一巻の一読目を完了させる。

デューイの全集は、今日から教育哲学の章に入る。昨日読んでいた章はどちらかというと、デューイが多大な影響を受けた、チャールズ・サンダース・パースやウィリアム・ジェームズといった哲学者たちの思想に言及しながら、プラグマティズムに関する論考を展開していくものだった。

今日からは、ある意味、私が本書を読む意味の一つに掲げていた、デューイの教育哲学の章となる。今日もデューイから様々な示唆を得ることになるだろう。

デューイの哲学書に並行する形で、今日も作曲実践を進めていく。明日こそ例外的に講義があるが、今週は大学が休みの期間であり、この期間は随分と作曲の実践に打ち込むことができている。二週間後から始まる冬休みの期間において、一旦学術研究から離れ、その期間の大部分は作曲実践に充て、幾分の時間を和書を読むことに充てたい。

昨日は改めて、いつか音楽に関する本格的な研究に着手したいと思った。今行っている研究と並行する形でそれを行ってもいいが、もしかすると音楽の研究だけに特化する時期があってもいいのかもしれないと思っている。音楽研究をするための科学的な手法に関する理解と技術は随分と高まり、あとは美学の観点が欠かせない。自分が行おうとしている音楽研究には、複雑性科学、システム科

---

学、ネットワーク科学の発想や手法を活用しようと思っているが、それらに関しては現在の研究を進めていく過程の中で理解と技術が徐々に高まりつつあるのを実感している。現在の研究に欠けているのは、より哲学的なアプローチであり、とりわけ美学の領域には強い関心を示している。美学への関心の芽は随分と前から生まれていたものの、本格的な探究には乗り出していない。

美学への関心の高まりを見るにつけ、そろそろ美学を探究する時期に差し掛かったのかもしれないと思う。理想的には、各作曲家の美意識の違いについての比較研究を行いながら、彼らの作曲理論と作曲技術の発達に関する研究を行っていきたい。

一昨日、研究グループのミーティングが終わった後に、グループメンバーの一人であり、友人でもあるオランダ人のハーメンとしばらくカフェで話をしていた。研究の話を少しした後、オランダや隣国の話をした。中でもベルギーに関する話が印象に残っており、どうやらベルギー人はオランダ人と容姿などは似ていながらも、気質的には随分と異なり、文化もだいぶ違うようだ。ハーメンの話を聞きながら、せっかくベルギーが目と鼻の先にあるのだから近々足を運んでみたいと思う。

来年の春あたりに、ポーランドのワルシャワを訪れ、ショパン博物館に足を運ぶ計画を立てている。ワルシャワに何泊かし、その足でドイツのデュッセルドルフに住む、かれこれ10年以上付き合いのある親友のドイツ人のところを訪れ、ボンに足を運びたい。ボンはベートーヴェンの生まれた場所であり、ウィーンだけではなく、ここにもベートーヴェンの博物館がある。ボンからフローニンゲンに戻る途中で、ベルギーに何泊かするという計画を立てている。春を迎えるのは随分と先であるが、そのようなことを暗闇に包まれた早朝に考えていた。2017/12/6(水)06:05

#### No.513: Qualitative Difference of Aesthetic Experience of Music

How differently do children, adolescents, and adults perceive music? In other words, how qualitatively different are their aesthetic experience? I am curious about the qualitative difference of aesthetic experience of music.

One possible approach is to use a qualitative interview method. I am thinking about how I can utilize nonlinear dynamics methods for this research topic. Since I need a number of data points, I have to make a robust research design. 15:16, Sunday, 12/10/2017



昨夜も就寝前に作曲実践に打ち込んでいた。現在読み進めているテキストが秀一であり、具体例の豊富さと、その具体例に紐付いた作曲エクササイズを進めていくことが何よりも楽しい。詰め将棋のテキストやプログラミングのテキストにのめり込んでいる感覚と同じだろうか。より端的に述べてしまうと、ゲーム的な要素がそこに色濃くあると言えるかもしれない。

昨今、教育研究や教育実践の中で、ゲーム的な様子を学習に取り込んでいく「ゲーミフィケーション」が注目を集めているが、ゲームが喚起する喜びの感情には、私も関心を寄せている。しかし、そもそも学習には、ゲームにも勝るとも劣らない喜びの感情を喚起するものが内在しているはずであり、それをうまく刺激できないこれまでの学習観や教授法に問題があったのではないかと言えなくもない。

私は今、成人期を迎えてから改めて、学習が内在的に持つ喜びの感情を常に感じながら学習を進めていく日々を送っている。昨日も作曲実践をしながら、作曲実践が持つ中毒症状について考えを巡らせていた。それは肯定的な中毒症状であり、「創造的中毒症状」とでも呼んでいいような、創作行為に伴うある種の没入感が昨日もあった。ジョン・デューイの哲学書を読んでいる時にも、若干の差異はあるが、ほぼ同様の没入感のようなものが芽生えていた。

日々の探究活動の中にこうした没入感が芽生えているのも、絶えず私が何かを創ることを意識していることと関係しているかもしれない。哲学書を読んでいる最中も、何か閃くたびにそれを絶えず文章の形に残している。文章を創出するという行為がそこに媒介されており、それが創造的中毒症状を生み出すきっかけとなる。

作曲実践はまさに創作行為に他ならず、現在読み進めているテキストの構成は、もしかすると創作に伴う喜びを喚起するような配慮があるのかもしれないと思う。学習支援を行う上で、どうやら創作に伴う喜びの感情をいかに刺激し、それをいかに喚起していくかが鍵を握るように思えて仕方ない。ひとたびこうした感情が生まれてくると、そこから自発的な学習が連続的に起こり始めるのではないかと思う。私の場合はまさにそうであり、一つの創作行為に伴う喜びの感情がまた別の創作行為を呼び、その新たな創作行為がまた喜びの感情を生み出していく。それは連続的なサイクルであり、

---

このサイクルの進展に合わせて、創作の技術が向上し、それに伴って創作の喜びの質も深まりを見せているように思える。

自分自身の内側で日々生じているそうした現象を観察しながら、学習が本来的に持っている喜びの感情をいかに喚起していくかの学習方法を体系化する必要性を感じている。出発地点は自らの経験であり、その経験から導き出された方法論を当面は自らの探究活動に適用していく。適用過程を経る中でその方法論を洗練させ、より普遍的なものになればと思う。

創作に伴うこうした喜びの感情の根源には、どこか美的なものを感じざるをえない。創作とはもしかすると、私たちの美的感覚の表現であり、美的感覚の表出が、そうした形容しがたい喜びや充実感をもたらすように思え始めてきている。2017/12/6(水)06:31

#### No.514: Development of Elderly People's Musical Composition Skills

I came up with another research idea about the development of musical composition skills. In my near future, I may focus on the developmental processes of aged people; how elderly people develop their musical composition skills.

If I can investigate their aesthetic development, that would be fabulous. I believe that elderly people can develop their composition skills and cultivate their aesthetic understanding of music. I hope that the enrichment of their music world enhances the quality of their life. 15:47, Sunday, 12/10/2017

#### 1870. 時空間を超えるゴッホの手紙とハーモニー

昨夜は夕食後に、ゴッホの手紙を少しばかり読み進めた。その進みは遅いが、毎日少しずつゴッホの手紙を読み進めていくのは、私の中での一つの楽しみになっている。ゴッホの手紙を読んでいる最中は、今から百年以上も前のゴッホの時代にいるかのような感覚に襲われる。

手紙を含め、文章が生み出す空間は時間を越えうる。また、現在自分がいる物理的な空間を超えて、文章が生み出す空間へと参入している自分を眺めていると、文章は空間も超えていく。

---

ゴッホの手紙を読み進めていると、ゴッホが弟のテオをどれだけ信頼し、まさに二人三脚で画家としての道を切り開いていったことがわかる。ゴッホは常に自分自身のみならず、手紙を通じてテオと対話をしていたのである。自分自身で行う一人称的対話と他者を通じた二人称的対話が、画家としてのゴッホ、そして人間としてのゴッホを育てていった。

全六巻のうち、今は第一巻を読み進めているが、一連の手紙を読み進めていく中で、ゴッホの画家としての内面的成熟過程と絵画技術に関する発達過程を見て取ることができる。とりわけ私は、絵画に関する、いや美に関するゴッホの思想的変遷過程に強い関心を持っており、合わせて絵画の方法論に関する発達過程にも多大な関心を寄せている。今日も手紙を開き、ゴッホが生きた時代と場所に自分の存在を投げ入れたいと思う。

昨夜、作曲実践をしている中で、歓喜の瞬間を迎えた。現在用いているテキストを読み進めていると、ある章がハーモニーについて取り扱っており、そこに掲載されていたわずか四小節の楽譜を作曲ソフト上に打ち込み、それを再生してみた。すると、その音色の美しさに仰天した。あまりの美しさに、私は思わず天井を仰いだ。美的感覚の中、呆然と口が開いていた。「これがハーモニーなのだ」という強烈な原体験をすることになったのである。

ハーモニーの存在意義とその効果は、私が思っていた以上のものだった。あいにく、現在取り掛かっているテキストは、メロディーを創出することに焦点が当てられており、ハーモニーに関する記述は多くない。先日注文した作曲関連の書籍の中、三冊ほどがハーモニーに関するものであるため、それらの到着が今から待ち遠しい。

当然ながら、モーツァルトも指摘しているように、曲においてメロディーは命であるため、メロディーの創出に関する理論と技術を高めることに精進していく必要が今後もある。だが一方で、ハーモニーに関する理論と技術も同じぐらいの投入量を持って、その探究を進めたい。

今日から読み進めていく数章は、ハーモニーを中心的な話題として取り扱っているため、今日はハーモニーに関してまた大きな気づきと発見を得ることになるだろう。2017/12/6(水)06:50

---

## No.515: Music Composition for the Elderly

If elderly people can find joy in music composition, I hope that they can discover new meanings in their life. Since the population of the aged increases year by year, I imagine that my research on music may be able to make a contribution to our aging society in a unique way. 15:53, Sunday, 12/10/2017

### 1871. 一年の重み

今日は午前中から昼食後にかけて、ジョン・デューイの全集を読み進めていた。気づけばいつの間  
にやら第一巻をすべて読み終えることができた。少なくとも四日はかかると思っていたのだが、結局  
二日で一読目を読み終えた。

デューイは教育のみならず、他の分野においても哲学思想を打ち立てているが、やはり教育哲学  
に関するものが最も感銘を受けた。書き込みをする箇所や、立ち止まって考えることが最も多かつ  
たのは、やはり教育哲学に関する章であった。デューイは芸術や美学に関してもいくつか論文を執  
筆しており、それらが一巻に掲載されていた。そこでは、今の私に響くものはあまりなく、また違う時  
期に読み直す必要があるように思えた。美学に関しても、それを細分すると様々な領域の美学が存  
在しており、デューイはそれほど音楽については語っていなかった。

今後美学関連の書籍や論文を読む際には、まずは音楽に特化したものを選びたいと思う。テオドール・アドルノを始め、何人かの哲学者が音楽に関する美学について思想体系を持っていることを少し前に知ったため、今後徐々にそうした哲学者の美学に関する思想に触れていくことになるだろう。

デューイの哲学書を読み終えた後、いつもと同じように少しばかり仮眠を取っていた。そこで少しばかり、人生における一年の重みについて考えていた。考えていたのは確かに私なのだが、意識的な自己というよりも、半覚醒状態の無意識的な自己がその主題について考えていた、と言った方が正確だろう。

人生の長さを考えてみると、一年の持つ重みを知る。ある一年をどこでどのように過ごすかは、決して見過ごすことのできないことのように思える。自分の望まない場所で、望まないことをしながら無為

---

に一年を過ごすことなどできない、という考えが脳裏をよぎっていた。そのようなことを考えていると、近い将来、どこの国のどの大学の博士課程に所属するかは極めて重要な選択のように思えた。というのも、欧米の大学の場合、博士号を取得するのは、一般的に四年から五年間ほどの時間がかかるからである。人生のうち、一年すらも非常に大きな重みを持つことを考えると、四年や五年という期間は、幾分気が遠くなってしまうような長さであり、さらに大きな重みを持つ時間となる。

この十年間を振り返ってみると、二年以上同じ場所で過ごしたのは、サンフランシスコ時代だけであり、それ以外は短い頻度で生活拠点を変えている。サンフランシスコですらも、結局二年半しかそこで生活をしていなかったから、四年や五年という月日を同じ場所で過ごすことは、今の私には信じられない。そうしたこともあり、博士号を取得する場所は、この世界において自分が最も納得する場所でなければならないように思う。そうでなければ、人生における貴重な四年や五年という期間を一つの場所で生活することなどできないだろう。

その候補は今のところは米国のある大学であり、来年から客員研究員としてその大学に所属する予定である。その大学、そして大学を取り巻く環境と自分の魂が共鳴していれば、その大学の博士課程に進みたいと思う。そうなれば、私は六年か七年ほどの時間をその場所で過ごすことになる。そこで過ごす六年や七年という歳月は、もはや自分の人生と切っても切り離せないような重みを持つことになるだろう。2017/12/6(水) 15:29

#### No.516: A Winter Wonderland

I am seeing a winter wonderland at this moment. It snowed very much yesterday. Because of the heavy snow, the beautiful white world is manifest. I am listening to Grieg's piano works all of which enable me to imagine as if I were in Norway. This winter wonderland in Groningen makes me imagine Norwegian winter. 08:18, Monday, 12/11/2017

#### 1872. 自己超出と時間超出

朝は八時半頃にようやく明るくなり、夜は五時を過ぎるともう真っ暗になり始めた。今、この日記を綴っている私の目には、真っ暗闇の世界が見える。

---

昼食後の仮眠を通じて、一年の持つ重みについて考えを巡らせていた。その思考の流れは一旦落ち着いたが、再びそれに似た思考が動き始めている。

思考の残滓からの新たな思考の誕生。新たな思考によると、そういえば今年の夏は、私はまだ日本にいたことを思い出した。日本を出発したのが今年の八月であったため、今年の夏の半分はまだ日本で過ごしていたのだ。今年の夏を人生の時間軸の中に置いてみると、それはそれほど遠くなく、むしろ近くにあると言えるだろう。しかし私はどうも、今年の夏というものが遥か遠くにあるような感覚がするのである。

一年が持つ重み、それは時間を押し広げるかのような特性を持っているように思えて仕方ない。一年はとても重いのだが、一年前がこれほどまでに遠くに感じるのは何故なのだろうか。

欧州での生活を始めて以降、自己を超出する体験に遭遇する頻度が増している。先日もそのような体験があった。自己認識が自己認識をはみ出していくという奇妙な感覚なのだが、そうした奇妙さに対する免疫がすでに出来上がっている。

一般的に、人間の発達自己を超出していく過程として捉えられるため、私たちは日々自己を小さく超出するような経験を見えないところでしているはずである。ところが、私が時折遭遇する自己超出体験は少しばかり特徴が異なる。小さく自己を超出する時、私たちは自己が自己を超出したことに気づかない。なぜなら、超出した先の自己は既存の自己の延長に過ぎないからだ。しかし、私が述べている自己超出体験は、既存の自己を大きく超えていき、自己の外側に出る。まさに、自己認識が自己を超えていき、認識主体の外側に出るのである。

この体験を初めてしたのは、米国での生活を始めた最初の年であり、今から六年前のことになる。自己をひとたび超出することによって、自己を超えていく通りの道のようなものが自分の内側に作られたようだ。実際にそれ以降、自己が認識主体を超えていく体験をすることが多くなり、欧州での生活を始めて以降は、その体験機会が増すばかりである。

この体験についてはまだまだ未知なことが数多く残っている。認識主体を超出する瞬間には、言語機能が一時停止し、その体験から再び戻ってきたとしても、その体験を言葉で表現するのは極めて難しい。それは言語を寄せ付けないような体験として、自分の内側に存在している。だが、そうした

---

---

体験をするたびに、わかった範囲の事柄を言葉で書き留めるようにしている。そうしたことを繰り返すことによって、徐々にその体験を言葉にすることが可能となり、その体験が持つ意味や特徴などが徐々に明らかになりつつある。

先ほど、時間という概念からその体験を捉え直してみると、少しばかり興味深い気づきが生まれた。自己超出体験は、認識主体を超えていくのみならず、時間をも超えていく。自己が自己の外側に出る瞬間に、時間をも超え出ているのである。時間を超え、再び時間が存在する世界に戻ってくると、私の時間感覚が以前のものとは異なったものになっていることに気づく。

一年の重みと一年の距離が伸びているように感じていることは、そのことと関係しているだろう。さらに興味深い発見事項として、時間を超え出ている体験をするたびに、時間が働く世界に戻ってくると、内側の世界の時間が豊かになっている気がするのだ。言い換えると、内面世界に内的時間が蓄積されていく感覚があるのだ。この感覚に忠実になってみると、時間とは流れ去っていくものではなく、本質的には、内面世界に蓄積していくものなのではないかという考えが芽生えてくる。

この考えを人間発達の原理と関連付けてさらに考えてみると、発達とは、内的時間感覚の蓄積であり、時間を含んで超えていくことに他ならないのではないかと思う。どうやら時間にも階層性があり、私たちはそれを含んで超えていく過程の中で、内面世界の時間感覚をより豊かに、かつ深くしていくようなのだ。内的世界の成熟とは、つまるところ、内的時間の成熟を意味するのではないかという気づきは、一つまた自分にとっては大きな意味を持つものだった。2017/12/6(水)18:02

#### No.517: White World and Colorful World

It is still snowing. The world becomes whiter and whiter. I will finish writing a research proposal. After that, I will come back to music composition.

In contrast to the white world outside now, my inner world is getting more and more colorful by virtue of music composition. 17:30, Monday, 12/11/2017

---

## 1873. 豪華客船の旅

今日も書いて作る一日が始まった。五時半あたりに起床し、今日は六時から探究・創作活動を始めた。この地上で生きることの喜びを心の底から感じ、それを探究と創作の糧にしたい。昨日も改めて自分は、文章を書き、音楽を作ることを通じて日々を生きていきたいと思った。

文章にせよ、音楽にせよ、それらを限りなく日常の生に近づけ、生の根幹からそれらが生まれてくるようにしていかなければならないと思った。それが可能になるのであれば、その他のことは何も望まない。日常の生に根ざす形で文章や音楽を生み出していくためには、やはり日記的な形式が最も望ましいのではないかと思う。文字どおり、日記としての文章を書き、日記のように音楽を作っていく。

日々が日記のようであってほしい。日々が日記を綴る過程の中で綴られていくのである。日々は綴られるものであり、日々は綴っていくものなのだ。

この生を生きるというのは、その瞬間に地上で生きていることの喜びを感じ、それを何らかの形として表現していくことなのではないかと思う。もしかすると私は今後、日記と曲を書くことだけに従事するような生活を送り始めるかもしれない。

学術的な論文ではなく、生により根ざした日記。形式ばった曲ではなく、生により根ざした日記的な曲。日々を自分の言葉で綴るには、そうした形式を採用する必要がある。日々刻々の瞬間を文章や曲として残し続けている人間は、この世界にいったいどれだけいるのだろうか。もしかしたらそのどちらにも従事している人は、この世界において限りなく少ないのかもしれない。だが、私はどうもそれに従事し続けたいという衝動に駆られているようなのだ。

そのような生き方があってもいいのではないか、昨夜はひどくそのようなことを考えていた。人間が人間として生きることを問い続け、この地上で生きることの喜びを見出しながら、その全ての過程を言葉や音として残していくのである。私はそれを、「存在の克明な記録」と名付けている。

自分が生きることを探求しながら、本当にこの世界を生きたという過程を全て記録しておきたいのだ。もはや、こうした思いの根底に何があるのかなど分からない。とにかく、日々を生きること

---



---

の中で喚起された小さな感動や感謝を見逃すことなく、それを全て文章や曲として残していくのである。

昨夜、陸上の旅のみならず、海の上の旅について思いを巡らせていた。そこで少しばかり、船旅を敢行するにはどのような手段があるのかを調べていた。豪華客船でこの世界を回っていくツアーのようなものがいくつか目に止まった。私はぼんやりと、それらのツアーの紹介文を眺めていた。長いもので言えば、100日を越すものまである。そのツアーの内容を見ていると、毎日が非日常体験の連続であるかのように思えた。

ツアーを終えた人たちは、どうやって再び日常生活の中に戻っていくのか気になる場所である。明らかにそうしたツアーは、非日常体験の提供であり、そうした非日常体験の中で何を考え、何を感じ、非日常体験を終えた後の日常に戻ってきた時に、いかにその旅の体験を日常の中に還元させていくか、という発想は大事なのではないかと思う。なぜなら、非日常体験は往々にして、非日常体験として日常から切り離され、単に消費される体験に成り下がってしまうからだ。

非日常体験も日常体験も、どちらも共に、この世界で生きることの喜びを内包していることに変わりはない。それらを切り離すのではなく、それらを超越したところからこの日常を捉えていく必要があるのではないだろうか。それができた時、私たちは日々の一瞬一瞬に感動や歓喜を覚え、そして感謝の念を忘れることはないだろう。

フローニンゲンの朝の闇はやはり深い。深い闇を見つめながら、私は豪華客船でこの世界をゆっくりと回りながら、日記と曲を作ることだけに従事している日々について思いを馳せていた。2017/12/7(木)06:22

#### No.518: Research Project and Research Internship

I do not have to hurry my current research project. I will not urge myself to engage in it too much. Self-control is important because I need to juggle some work.

Since a research internship will start from February, I will gradually tackle with my research during the internship. I need to ask the internship director about whether I can conduct a small

---

study that links with my current research project. If it is allowed, I can advance my research more effectively. 19:36, Monday, 12/11/2017

#### 1874. 言葉と音の光に包まれて

日々、自分の内側に湧き上がる現象を絶え間なく文章として書き留めることを始めてから、少しばかりの月日が経った。気づかないうちに、それを行うことが日々の習慣の一つとなり、それはもはや習慣を超え始めている。

絶え間なく文章を書き続けることが、この地上で生き続けることと全く等しくなり始めている。言葉を紡ぎ出し続けることによって、私は自分の認識世界を絶えず更新しているかのようなのである。言葉を生み出すことは、この現実世界を生み出すことに他ならず、新たな言葉を日々生み出し続けていくことは、この現実世界を日々新たなものにしていくことに他ならないだろう。

言葉を紡ぎ出す過程の中で、自分がこの世界に生きていることを真に感じ、その言葉がまた新たな現実世界を作り出していく。言葉の恩恵を受けながら、言葉を紡ぎ出すことによって、日々の中に宿る充実感や幸福感の原子を捕まえていく。

充実感や幸福感の原子は、実は日常生活の基底に、水や空気のように存在しているものなのだ。本来、この地上で生きる充実感と幸福感は、この地上の遍くところに充満している。

私たちの眼は往々にして曇らされている。だからそうした充実感や幸福感が見えないのだ。

私は、言葉という光を用いることによって、そうした充実感や幸福感の原子を日々の生活の中で絶えず捉えていきたいのだ。最初は意識的な試みかもしれない。だが、そうした試みを続けていけば、いつか必ず、この地上は充実感や幸福感で満たされたものなのだという気づきに至るだろう。そうした認識世界が開けてくるまで、私は日々を綴り続けたいと思う。いや、そうした認識世界が開けてきたのであれば、なお一層日々を綴っていくことになるだろう。

日々を綴り続けていくこと。それはいつか必ず、充実感と幸福感の遍満するこの地上の真の姿を開示してくれるだろう。

---

昨夜夕食を食べながら、日々を言葉で綴ることに加え、日々を音として綴り続けることについて考えていた。日々いかなる時においても、メモ帳さえあれば言葉を書き残しておくことができる。それと同じように、日々いかなる時でも曲を残しておくことができれば、なんと理想的だろうかと思った。実験として、まずは頭の中だけで作曲実践を行ってみた。すると、数ヶ月前はそのようなことは全くもって不可能だったのに、今はそれが少し可能になっていることに気づいた。文章の執筆と同様に、作曲も認識世界の中での記号操作を要求されるという点では同じであり、音の記号創出に習熟すれば、それを頭の中だけで行うことは十分に可能なのだと知る。

そこから私は、作曲実践とは書斎の机の上だけで行うものではなく、日々の生活の中の至る場所で行えるものであり、生活の至るところで行っていくべきものなのだと自覚した。日常のいついかなる場所においても、絶えず言葉を紡ぎ出しているのと同様に、時間と場所を選ばずに作曲を頭の中で行い、そこで生まれた音楽をメモとして書き留めておきたい。

絶えず言葉と音を紡ぎ出していくこと。それは私の人生において不可欠なものとなり、日々が充実感と幸福感そのものになるための尊い営みなのだと知る。2017/12/7(木)06:50

#### No.519: Toward New Research

I want to conduct new research next year that is based on my three master's degrees—developmental psychology, talent development and creativity, and evidence-based education.

The new research will be conducted as a visiting fellow at a university in the US. Since the research requires me to get familiar with psychology in music, I need to look for a couple of professors in the university who specialize in the field. In the morning, I will search who are familiar with the subject that I will investigate. 07:01, Tuesday, 12/12/2017

#### 1875. やってくる冬への高揚感

今日は午後から雨が降り始め、今もまだシトシトと雨が降り続けている。今日は午後四時半を過ぎると、辺りは既に闇に包まれ始めた。

---

今日の午後に「応用研究手法」のコースの第三回目のクラスに参加した。今日は前回に続き、“difference-in-difference”という研究手法を取り扱った。

このコースを履修しているのは、ジョージア人の友人であるラーナと私だけしかいないため、クラスではいつも密なディスカッションをロエル・ボスカー教授と共に行うことができる。ボスカー教授は非常に丁寧に一つ一つの概念や研究手法の論理を説明してくれるため、いつも有り難く思っている。

今日のクラスでは、必読論文に対して私が事前に提出した四つの質問を取り上げてくれた。今日のクラスの大半は、私の質問をもとにディスカッションが進んでいったと言っても過言ではない。

前回のクラスから、パワーポイントを用いた説明ではなく、フリップボードを用いてボスカー教授がその都度私たちの質問や意見に対して詳しい説明をしてくださるようになった。基本的にこのクラスは、教育科学におけるいくつかの重要な研究手法に関する論文を読み、論文についての質問をもとに行われていく。もちろん最初にボスカー教授から、その日に取り上げる研究手法の概略説明があるが、論文に対する質問がまさにこのクラスを作っていると言っても過言ではない。

次回のクラスへ向けた課題として、今回取り上げた研究手法と、次回に取り上げる“regression-discontinuity”との違いを明らかにしておく必要がある。これはまさに、実は私が事前に送っていた補足質問であり、それが課題として出されたため、再度考えるきっかけを得られたと言える。今日はクラスが早めに終わったため、クラス終了後にラーナと少しばかり話をしていた。

校舎の外に出ると、時刻は四時半を迎えたばかりであったのに、辺りは既に暗くなっていた。ラーナ曰く、ジョージアはこの時期でも六時半ぐらいまでは日が出ているらしい。別れ際にラーナがふと、「今年の欧州は例年以上に冷え込むそうよ」と苦笑いを浮かべながら述べた。今年の欧州の冬は相当に寒くなるらしい。実際に、明日の天気予報は雪マークである。ラーナとその場で別れ、私は雨が降りしきる中、行きつけのチーズ屋に立ちよることにした。

辺りはもう闇に包まれており、雨がシトシトと降り続けているにもかかわらず、そして今年の冬は例年になく冷え込むという話を聞いた直後であったにもかかわらず、私の心はなぜだか高鳴っていた。今の私には、この日常世界が輝いて見えている。2017/12/7(木) 18:05

---

## No.520: Counterpoint

Because I have gradually become able to write a melody line, I wanted to learn counterpoint. “The study of counterpoint (1965)” is very useful to accomplish the aim. Since yesterday, I have begun to read it. Although this book is thin, it contains a number of insightful information about counterpoint. In addition, the book is written in a dialogue format, it is easy to read. I will continue to read it today. 07:06, Tuesday, 12/12/2017

### 1876. トマトとブルーベリーから

大学からの帰り道に行きつけのチーズ屋に立ち寄り、今日は若いチーズを購入した。先日訪れた時は、その店に置かれている一番古いであろう七年物のチーズを購入していたが、今日は対極に振り、非常に若いチーズを購入した。七年物のチーズはこれまでこの店に置かれていなかったものであり、大変珍しいものだった。長い時間をかけて発酵されたチーズ固有の深い味わいがあったのを覚えている。今日も同じく古いチーズを購入しても良かったのだが、なぜだか私の目にはその若いチーズが輝いて見えた。

私:「あれっ、このチーズは前から置いてましたっけ？」

店主:「ええ、置いていたわよ」

この店を切り盛りする二人の女性の店主のうち、一人の方がそのように答えた。私はてっきり初めてみるチーズだと思っていたのだが、どうも私の認識の誤りのようだった。そのチーズが若いだけあつてか、他のチーズと輝きが違ったのだ。これは文字通り、物理的な輝きである。

その若いチーズには薄黄色い輝きがあつたのだ。私はその光に惹かれて、他のチーズには一切目をくれず、そのチーズを少し試食させてもらうことにした。

店主:「どう？ 今回のチーズは若いわよ」

私:「ああ、これも美味しいですね。今日はこれにします」

---

これまでこの店に置かれているいくつもの種類のチーズを食べた経験から、出来立てのチーズよりも幾分かの期間発酵されたチーズの方が美味しい。そのチーズの味もまだ深みがあるとは言えなかったのだが、その輝きに独特の旨味を私は感じていた。

「光の味」とでも形容できるものが、そのチーズにはあった。また、前回七年物のチーズを切ってもらった時に、その作業があまりにも大変であり、今日は店主が切りやすいチーズを購入しようと思っていたので、その若いチーズはなおさら最適だった。

私:「今日は切るのが簡単ですね(笑)」

店主:「そうね(笑) 前回は本当に大変だったわよね」

店主は見事な手さばきで、一瞬にしてそのチーズをいつも通りの分量切り取ってくれた。チーズと合わせて、私はいつものお決まりである、ナッツの詰め合わせ300gとマカダミアナッツ200gを購入した。

先ほど夕食の準備をしている時に、いつもと同じようにトマトを冷蔵庫から取り出し、最近夕食後に食べているブルーベリーを準備した。よくよく二つを眺めていると、いつもより随分とサイズが大きいことに気づいた。トマト一個の大きさとブルーベリーの一粒一粒が、いつもに比べて大きくなっていることに気づいたのだ。それらをしばらく見つめていると、冬の季節に入ったことにより肥大化現象が起きているのかもしれないと思った。

今年の夏にノルウェーのベルゲンのホテルに滞在していた時に、南極のドキュメンタリー番組を見た。そこでは、なぜ南極の生物たちが肥大化しているのかについて説明があった。興味深いことに、生物は極度に寒い環境では肥大化する傾向があるらしい。もちろん、全ての生物がそのような傾向を示すとは限らないと思うが、南極に生息している生物たちは軒並み肥大化している傾向にある。

私は目の前に置かれたトマトとブルーベリーを見ながら、そのことについて思い出していた。目の前にあるトマトとブルーベリーは過酷な寒さを乗り越え、このように立派な実をつけたのだ、と感慨深く思った。

---

トマトとブルーベリーをいつもより優しくゆっくりと食べている自分がそこにいた。このトマトとブルーベリーのように、この冬を乗り越えることによって、私の内面世界もより深く、より実りの多いものになってほしいと願う。2017/12/7(木) 19:42

#### No.521: Buoyancy of Body and Intrinsic Music

While I was taking a nap, I felt as if my body were flying. I perceived that my body had the nature of buoyancy. Furthermore, I had a feeling that the buoyancy might originate from the intrinsic music within my being. In fact, I was playing piano in the semiconsciousness during the short nap. The experience was very mysterious but intrigued for further interpretation and analysis.  
14:57, Tuesday, 12/12/2017

#### 1877. 対岸に向かう夢

早朝、起床と共に、小さな雨音が聞こえてきた。今日はどうやら雨のようであり、昨日の天気予報からすると、雪が降るかもしれない。

今日は六時半から、一日の活動を静かに始めた。活動の開始は、自分が生きていることの実感を確かめるためにあり、自己の存在を証明するためにあるように思える。

昨夜の夢の内容が、そっと自分の意識の中に立ち現れる。夢の中で私は、瀬戸内海にほど近いある町にいた。その町は、実際の実家の近辺のようでありながらも、ヨーロッパ風の町並みをしていた。私は一台のバスに乗り込み、瀬戸内海の方に向かった。

バスに乗ってみると、そのバスは無人だった。運転手はおらず、乗客も私以外にいない。誰もいないバスは、私がそれに乗り込むと、静かにドアを閉め、ゆっくりと動き始めた。私が降りる予定の場所は、名前のわからない通りと「ヴァン・ゴッホ通り」と名前が付けられた通りが交差する地点だった。

ゆっくりと走るバスの窓から、私は景色を眺めていた。だが、町にも人影は見られなかった。人がほとんど見えないながらも、確かにその町には人が住んでいる気配があった。ちゃんと店もあり、道も整備されており、家もまばらに見える。そうしたことから、この町は決して無人ではないのだということを知る。しかし、バスから目的地に向かうまでの間中、人の姿を確認することはできなかった。

---

---

目的地に近づいてきているのがわかったが、その正確な場所を私は知らず、またどのようにこのバスから降りたら良いのかもわからなかった。バスが坂道をゆっくりと下りだし、ある場所でバスは止まった。どうやらここが終着地点のようであり、同時に私の目的地でもあった。バスはまた静かにドアを開けた。

バスから降りようした時に、ふと運転席を見ると、無人であったはずなのに、運転手の影のようなものが見えた。それは確かに人のようであり、同時に単なる影のようでもあった。

私がバスの真ん中から降りた時、バスは再びドアを静かに閉め、その場でじっと停車していた。到着した目的地から瀬戸内海までは目と鼻の距離であり、私の視界にはすでに光り輝く瀬戸内海が見えた。

バスの停車地点から少し歩くと、すぐに松林に行き当たり、砂浜が見えた。そのまま松林を歩いていると、一つの浮き輪を見つけた。それは輪っかの形をしておらず、新幹線や飛行機などで使われる、輪が半分の枕のような形をしていた。私はそれを拾い、お腹の周りに巻くようにして、松林の中を軽く走ってみた。すると突然、走る速度に合わせ、自分の体が宙に浮き始めたのである。どうやらこの浮き輪を用いれば空を飛べるようだとなった。

私はほんの数メートルの高さをゆっくりと飛びながら、松林の最終地点まで向かった。松林が途切れると、そこは砂浜だけが広がる世界であった。その砂浜では、多くの人たちが思い思いにリラックスをしている。子供たちの姿も多く見える。子供たちは砂浜を走っていたり、砂で何かを作っている。

そうした光景を眺めながら、私は瀬戸内海とは別の海がぶつかる地点、あるいは大きな運河がぶつかる地点にやってきた。どうも今は満潮の時間のようにあり、合流地点の流れは激しかった。

私が立っている地点は、海から幾分高い場所にあり、私は上から海流の動きを眺めていた。海と運河の合流地点によって、砂浜は分断されており、向こう岸までの距離は数キロほどあった。

対岸の松林の直ぐ近くに私の実家があるのが見え、そこで初めて、私は実家に足を運ぼうとしていることを知った。そのため、どうしてもこの運河を越えて、対岸まで行く必要があった。当然ながら、

---



---

目の前の海流は、人間が泳げるようなものでは決してなかった。それは人を丸呑みにするような、極めて激しい流れだった。

私は手に持っている浮き輪を握りしめながら、この浮き輪を使いながら空を飛んでいけばいいと考えていた。しかし、仮に途中で浮き輪がうまく機能せず、空を飛ぶことができなくなってしまったらどうすればいいのか、という不安があった。私はその場に立ちすくみながら、しばらく考え込み、人を寄せ付けない激しい海流が作り出す渦を呆然と眺めていた。海流の一部は、この世界の何か鬱積したものを吐き出すかのように、こちらの岸から対岸に向かって激しい流れを作っていた。

しばらく考えた挙句、結局私は空を飛んで対岸に向かうことをしない決断をした。その決断をした直後、私は振り返り、元来た砂浜を歩いて戻ることにした。その途中、松林と砂浜のちょうど中間に、一つの幼稚園があることに気づいた。どうやら中国人が多く通っている幼稚園らしく、日本人の子供と中国人の子供が楽しそうに砂浜を走っていた。

私はその様子を微笑ましく思った。私のそばを駆け抜けていく子供の姿を見るたびに、私は何かを考えていた。考え事をしながら歩いていると、結局元のバス停まで戻ってきた。私は再びバスに乗り、バスで対岸にある実家まで向かうことにした。

先ほどのバスはまだそこに停車しており、バスに乗り込むと、やはりそこには人が誰もいなかった。バスのドアがそっと閉まる。そして静かに動き始めた。

バスに揺られ、窓の外を眺めながら、私は先ほど考えていたことの続きを考えていた。気づくとそのバスは再び、先ほどの最終地点であった、「ヴァン・ゴッホ通り」にそっと停車した。2017/12/8(金)  
07:13

#### No.522: Two Books about Harmony

I am self-taught to compose music. After I came back from the university to my house, two books were delivered from the UK. The one is “Guide to the practical study of harmony (2005)” written by Tchaikovsky, and the other one is “Structural functions of harmony (1954)” written by Schoenberg. Both authors were great composers. I immediately took a look at both books from

---

my irrepressible curiosity. I thought that the former book was more accessible for me, considering my current musical knowledge.

After I read Fux's book about counterpoint at least twice, I will read Tchaikovsky's book about harmony. I look forward to reading it on my holidays in Japan. 16:43, Tuesday, 12/12/2017

### 1878. 此岸から彼岸へ

雨音が激しくなり、今日も天気が優れないことを知る。時刻は七時を回ったが、相変わらず外は闇に包まれている。闇の中、雨が書斎の窓ガラスにぶつかりと音と、時折車が通りを走る音が聞こえる。先ほど私は、昨夜見た夢について、その内容を覚えている範囲で書き留めていた。

あの夢の中心テーマは一体何だったのだろうか。私は運河を越えて、対岸に向かおうとしていた。なぜなら、向こう岸に私の目的地である実家があったからだ。しかし、先ほどの日記に書き留めていたように、夢の中の私は流れの激しい運河を越えていく手段がなかった。厳密には、不思議な浮き輪を体に巻きながら空を飛んでいくことができたのだが、その浮き輪が途中で機能なくなる恐れがあり、結局対岸に向かうことを躊躇していたのだ。

しばらく対岸を眺めた後、私は来た道に戻り、再び無人のバスに乗り込んだ。だが、結局そのバスも対岸に向かって走っておらず、私はまた同じ場所でバスを降りることになった。あのバスはどうやら、同じ道をぐるぐると回り、乗客をあちら側の岸に連れて行くことを目的にしていなかった。

人を飲み込むような激しい流れの運河、対岸、誰も人のいない奇妙なバス。私はそれらについて思いを巡らせていると、ある大きな気づきを得た。どうやら夢の中の私はあちらの世界、つまり彼岸に向かおうとしていたようだが、結局それを果たすことができなかったのだと知る。

夢の中で、こちらの岸からあちらの岸を眺めている時、確かにあちらの岸はこちらの岸とは少しばかり違う印象を放っていると感じていた。対岸は彼岸を象徴していたのだ。では、あの流れの速い渦潮は何を象徴していたのだろうか。そもそも、私がこちら側の岸の先端に到着した時、突然に潮が満ち始めたのは不思議な現象だった。潮が満ちるというのは、この世界の人間の欲望の増加を表

---

しているように思えなくもない。潮が満ちるといのは、この現代社会で生きる人間たちの欲望の膨張であり、人を丸呑みにするようなあの激しい流れは、現代人の肥大化した欲望の渦だったのだ。

こちら側の岸に立ち、激しい渦潮を眺めながら、私は暗澹たる気持ちになっていたことを思い出す。あの渦潮は、この現代社会の深層に息づいている、目には見えない人間の欲望だったのだろう。

対岸に向かう別の手段を考えながら、私は来た道を引き返していた。そこで見た、日本人と中国人の子供たちが仲良く遊んでいる姿は、また別のことを象徴しているように思えた。

この世界には、目には見えない巨大な欲望の渦がある一方で、そうした渦の存在に全く気づかない、純粹無垢な人間がいるのだ。子供たちが無邪気に遊ぶ砂浜の少し向こう側には、欲望で渦巻くあの激しい流れの運河が待っていた。そのようなことを考えていると、不気味な旋律が聞こえてくるかのようである。

結局私は、あの場所にやってきた際に使ったバスに乗って、対岸に行こうとしていた。だが、あのバスは対岸まで走っていなかった。それが何を象徴していたかという、それは此岸の中で生き続ける私を象徴しており、あのバスが旋回していたように、此岸をさまよう私がこの世界にいることを象徴していたように思えてくる。

あちらの世界、つまり彼岸に向かわなかった私の選択は正しいものだったのかを改めて考えている。そのようなことを今更考えても仕方ないかもしれないが、有無を言わせずそこに考えが向かっていく何かがある。しかしながら、自らの選択の正しさを考えていく手立てや観点が一向に見つからない。人間の欲望が渦巻く流れを超えて、彼岸に行くことは、私の思考を寄せ付けない、超越した何かが関与しているようだ。

欲望の渦巻くこの世界を日々生きている中で、乗車したバスが再び「ヴァン・ゴッホ通り」で停車したこの意味は何だったのだろうか。もしかすると、ヴァン・ゴッホ通りは、此岸と彼岸をつなぎ得る役目を果たしており、私はまだその道の本質を理解していないのではないかと思った。ここには二つの偶然が関与している。一つは、私は先日、ゴッホの作品を数多く所蔵しているクレラー・ミュラー美術館に足を運び、その後、全六巻にわたるゴッホの手紙を購入したことだ。

---

ヴァン・ゴッホ通りで二回停車したことは、ゴッホの思想と生き様と向き合い、そこから彼岸への足がかりを見つけていくことを示しているように思えて仕方ない。また、二つ目の偶然は、現在私が住んでいる通りの一つ向こうの通りは、「ヴァン・ゴッホ通り」という名前なのだ。

現実世界の中で、ヴァン・ゴッホ通りはすぐ近くのある場所にある。夢の中に現れたヴァン・ゴッホ通りは、自分の道は己の中にあり、その道を歩いていくことが彼岸への唯一の道であることを伝えているように思えた。

夢の中のあの時、私が空を飛んで彼岸に向かおうとしなかったのは、それは結局不可能な試みだからであって、この現実世界の自分の道を自らの足で一步一步歩いていくことが、彼岸に到着する唯一の手段だからだったのだろう。

彼岸への道、それは此岸の中にある自分の道でしかない。今日の一步は、彼岸への一步になるだろうか。それが自分の道の上の一步であれば、必ず彼岸への一步となる。2017/12/8(金)07:53

#### No.523: Fourth Master's Degree and Two Doctoral Degrees

It may sound a little bit crazy, I seriously think that I will obtain my fourth master's degree and then go to a doctoral degree. I have to appreciate my financial security. I think that it is bestowed upon me from something beyond me, which can be called a gift from the universe. By virtue of the gift, I can concentrate myself on what I want to do. All I want to do is just keep diaries and compose diary-like music.

After my fourth master's degree, I will compete a doctoral degree before I am forty. After obtaining it, I seriously plan to pursue a bachelor degree about music that specializes in composition. Then, I may go to my second doctoral degree about music composition somewhere in the world.

I will be around fifty years old when I obtain the second doctoral degree, which is not old at all but quite young to fully relish the rest of my life. 16:53, Tuesday, 12/12/2017

時刻は八時を過ぎたが、まだ暗闇の世界が続いている。昨日、ふと気付いた時には、夕方の四時半の段階で今この瞬間のような暗さがあった。いよいよ本格的に冬の季節に入ったのだと知る。

今朝は目覚めを迎えた瞬間に、まぶたを閉じると、無数のイメージが流動している様子を捉えることができた。これは半覚醒意識の際に時折起こることであり、大抵は昼食後の仮眠の際に起こる。今朝はそのような状態を目覚めの際に経験した。

私たちがよく「イメージ」という言葉を用いているものは、心的現象として実際に眼で見ることが可能である。もちろん、物理的な目を開いた状態でそれを見ることができないが、まぶたを閉じ、心の眼でそれを捉えることが可能となる。

私は、次から次に自分の内面世界で湧き上がるイメージを眺めていた。それは絶え間ないイメージの流れであり、イメージがイメージを呼び込むような現象であるように見えた。人間とはまさに、こうした絶え間ないイメージを生み出しながら生きている存在なのだと改めて知る。同時に、創造的な人間とは、こうした絶え間なく生成されるイメージを何らかの手段を用いて具現化させることのできる人のことを指すのだと思う。

今朝方私が見ていたイメージは、多分に視覚的であり、多分に聴覚的なものでもあった。つまり、流動するイメージを具体的な形として視覚的に捉えながらも、そこに固有の音が流れていることに気づいたのである。偉大な作曲家はもしかすると、視覚的かつ聴覚的なイメージを活用しながら作曲活動に従事していたのではないか、と思わされる。

心的現象としてイメージを捉える頻度、言い換えれば、イメージが生成する内的世界に接触する頻度がここ最近増加しているため、今後も引き続き、イメージの源泉とイメージの創出過程を観察したいと思う。

起床直後、いつものようにヨギティーを入れていると、ティーバッグのタグに付された文言に目が止まった。日本語に翻訳すれば、「人生に誤りなどはなく、正誤を下そうとするのは私たちの判断にす

---

ぎない」という意味の言葉だった。早朝から少しハッとさせられるような瞬間だった。「人生に誤りなどない」という言葉がとりわけ強く印象に残っている。

ここ数日間の間、自分の人生についてあれこれと考えており、もしかすると私はこれから人生の舵を大きく切るかもしれない。未だかつて誰も歩んだことのない生き方であり、同時にそれこそが真に一人の人間の生き方であるという思いから、私は今自分が考えているような生き方をこれから実際に進めていくような気がしてならない。確かにそれは私の意思に基づいてなされる行為なのだが、私の意思を超えた力によって人生がそうならざるをえないという方向に向かっているのもまた確かだ。

欧州で日々を送る過程の中で、自分の生き方というものがより鮮明になりつつある。何か、これまでの生き方に付着していたものが洗い流されるような感覚であり、生きるということの本質的かつ純粹な意味が顔を覗かせ始めていることに気づく。自分の人生において、日々どのような行為をなしながら彼岸に向かっていくのかを、私は徐々に気づき始めている。

人生に誤りなどはなく、そこにあるのは生きることであり、生きる過程を通じて積み重ねていく営みだけがそこにある。2017/12/8(金)08:27

#### No.524: An Impasse and a New Doorway

I felt that I was facing an impasse about music composition. In particular, I had no idea of how to compose two independent melodies simultaneously. However, I found a doorway to overcoming the impasse. That was counterpoint. Since a couple of days ago, I started to read “The study of counterpoint (1965).” I almost finish the first reading. Because I try to grasp the overview of counterpoint, I do not closely read it. After the first reading, I will begin to read it again. In the second reading, I strive to grasp the details of counterpoint. 06:49, Wednesday, 12/13/2017

### 1880. 美と内面的成熟

ついに雪が降り始めた。欧州の他の地域ではすでに雪が降っていた場所が数多くあるそうだが、オランダ北部のフローニンゲンは、本日ようやく雪と遭遇することになった。

---

白い雪がなんとも言えない美しさを身にまといながら地上に降りてくる。外は間違いなく寒いと思われるが、そんなことを忘れさせてくれる景色が、今私の目の前に広がっている。

天から舞い落ちてくる粉雪は、自然の恵みであり、自然が生み出す美であった。私は書斎の中で、グリーグのピアノ曲を聞きながら、白く輝く雪をただただ見つめていた。

朝が朝でないと思えるほどに、薄暗さが残っている。その薄暗さを照らすかのように、白い雪が空から舞ってくる。そんな光景を目にしながら午前中の時間は過ぎていった。

夕方、やはり四時半を迎えた時間帯からもう辺りは暗くなり始めていた。昨日は空に雨雲が覆っていたせいか、今日よりも暗さの深みがあったように思える。今はまだ、夜想曲が始まる前の準備をしているような光景が広がっている。遠くの空に黒く輝く雨雲がわずかな速度で動いている。何羽かの鳥が私の視界の前を通り過ぎていく。

欧州での一日一日が過ぎるごとに、自然にせよ、芸術にせよ、学問にせよ、そこに潜む美が様々な形となって徐々に私の眼の前に開示されるようになっていく。今まで見たことのないような美を、私は欧州での日々の生活を通じて少しずつ見出している。

今この瞬間に知覚される美は、以前の私には知覚されえなかったものだ。それを嘆いてもしょうがない。なぜなら、この世界には待つしか現れてこない美というものがどうしても存在するからだ。言い換えれば、内面的成熟があるところまで達しなければ知覚されえない美が存在するのだ。これは美的なものを感じる際にのみ当てはまることではなく、美を生み出していくことにおいても当てはまるだろう。

私はこれから自分の内面的成熟に応じて、未だかつて知覚されえなかった美が顕現されることへの大きな期待を寄せている。同時に、自分の内面の成熟と足並みを合わせるかのように、今の自分で創出できる限りの美をなんとか形にしたいと思う。それは日記の中、学術論文の中、曲の中に滲み出てくるだろう。

いつか、この世界が開示する溢れんばかりの美を絶えず目撃しながら、絶え間なく美を創出することを通じて、内外の世界を深めていきたい。2017/12/8(金) 16:36

---

No.525: Learning Counterpoint and Harmony

In parallel with reading “The study of counterpoint (1965)” again, I will read “Guide to the Practical Study of Harmony (2005)” written by Tchaikovsky. Both counterpoint and harmony are indispensable subjects to enhance my music composition skills.

When I read the book about harmony, I will attempt to comprehend the overview of harmony. I do not necessarily grasp the details this time. Delving into the details should be done in the second reading. I hope I will finish the first reading by early next week. 06:56, Wednesday, 12/13/2017